

原著論文

実習指導者講習会における地域包括ケアシステムに関する 授業内容の理解と課題

Participants' Understanding of and the Challenges in an Integrated Community Care System Class
in a Clinical Nursing Practice Instructors Workshop

大西淳子 安藤瑞穂 平田美和 川口奈美 宮本千津子

Junko ONISHI, Mizuho ANDO, Miwa HIRATA, Nami KAWAGUCHI, Chizuko MIYAMOTO



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈原著論文〉

実習指導者講習会における地域包括ケアシステムに関する 授業内容の理解と課題

Participants' Understanding of and the Challenges in an Integrated Community Care System Class
in a Clinical Nursing Practice Instructors Workshop

大西淳子 安藤瑞穂 平田美和 川口奈美 宮本千津子

東京医療保健大学千葉看護学部看護学科

Junko ONISHI, Mizuho ANDO, Miwa HIRATA, Nami KAWAGUCHI, Chizuko MIYAMOTO

Tokyo Health Care University, Chiba Faculty of Nursing

要 旨：目的：実習指導者講習会研修生を対象に行われた地域包括ケアシステムに関する授業の理解状況を明らかにし、授業改善に資する課題を見出す。
方法：当該授業終了後に、授業内容の理解状況と実習指導等への活用可能性に関して、自作の無記名自記式質問紙により回答を得た。
結果：44名（89.8%）から回答があった。授業内容の理解は95.5%ができた、実習指導への活用は95.5%ができると回答した。理解できた理由としては【新たな知識の獲得だった】【具体的な地域の取り組みが例示されていた】等の9つ、活用できると考えた理由としては【治療や療養方針の根拠として説明できる】【治療や療養方針を見通す必要性を説明できる】等の7つが抽出された。
結論：本授業は、実習指導において地域包括ケアの知識や考え方を活かす方法の学びをもたらしたが、具体的な活用方法については部署等の状況に照らして検討する機会が必要であることが示唆された。

Abstract：Aims：To identify participants' understanding of an integrated community care system class in a clinical nursing practice instructors workshop and to identify points at issue.
Method：Information regarding the intelligibility and the reason for the class were collected via anonymous self-administered questionnaires after a clinical nursing practice instructor workshop.
Findings：Questionnaires were returned by 44 participants. Most (95.5%) participants answered that they understood the purpose of the workshop. The reasons for answering that they understood were divided into nine groups (e.g., "get new knowledge" and "their understanding was aided by examples in the community"). The reasons for the answer that they could use the knowledge when instructing their students was divided into seven groups (e.g., "to explain as the evidence of the treatment policy", "to explain the needs of the treatment policy").
Conclusion：The participants obtained knowledge about an integrated community care system and, through this class, they obtained information on how to use it. However, more discussion is needed about the method of the lesson structure, which includes each of the participants' units.

キーワード：地域包括ケアシステム、実習指導、実習指導者講習

Keywords : Integrated Community Care System, Clinical Nursing Practice Instructors Workshop

1. はじめに

地域包括ケアシステムの導入・発展に伴い病院での医療は地域完結型へと転換をはかっている。看護基礎教育においてもこの転換に応え、地域包括ケアシステムを基盤とした地域完結型医療において適切な医療・看護を実践できる能力の獲得が目標とされている。したがって看護基礎教育の中で、この能力の獲得をカリキュラム要素として位置付けて、講義、演習及び実習を展開していくことが必要である。

このような教育を展開するためには、教員が地域包括ケアシステムと看護の役割を理解し、各科目に固有の内容と関連付け授業を設計することが必要であり、これは看護基礎教育において必須の臨地実習においても同様である。看護基礎教育における臨地実習では、実習指導者が教員との協働のもとに、学生と患者やスタッフとの橋渡しをしながら、効果的な学修が行われるよう指導を行っている。このため、地域包括ケアシステムにおける看護について学生が実習で学ぶためには、教員の理解及び授業設計に加えて臨床指導者の協力が不可欠である。しかし、地域包括ケアは新たな概念であり、これを実習指導に反映させるために必要な知識や指導スキルは検討されるべき課題であると考えられる。

東京医療保健大学に平成30年に新設された千葉看護学部は地域医療機能推進機構（JCHO）との協定のもと、地域包括ケアに資する看護専門職を育成することを目指している。これを実現する教育環境を整える意図で、千葉県の委託を受けて保健師助産師看護師実習指導者講習会（以下、実習指導者講習会）を実施することとなった。実習指導者講習会は、臨床指導者が看護基礎教育についての理解を深め、実習指導に必要な知識とスキルを習得し、効果的な実習指導ができることを目的として、厚生労働省が定めた実施要綱に沿って、全国で実施されているものである¹⁾。この中で、特に、当学部では、実施されている地域包括ケアを実習指導に活かすための授業を科目の内容に含んでいる。そこで、この授業の実施者として、授業終了後の研修生の学びを分析することで、地域包括ケアシステムにおける看護を学生が学ぶことができる実習指導に必要な実習指導者への授業内容や方法についての示唆を得たいと考えた。

2. 研究目的

東京医療保健大学千葉看護学部実習指導者講習会において、地域包括ケアシステムに関する講義とそこで得た知識を実習指導に反映させる能力の獲得を意図したグループワークに参加した研修生を対象に、授業内容の理解と実習指導等への活用可能性に関する認識等について調査を行い、理解の状況を明らかにし、授業改善に資する課題を見出す。

3. 研究方法

- 1) 調査対象：実習指導者講習会の研修生 49名
- 2) 研究デザイン：自記式質問紙調査票による量的および質的記述的研究デザイン
- 3) 調査方法

(1) データ収集方法

講義およびグループワーク終了後に、対象者に調査方法の説明と協力依頼を行い、無記名式の調査票を配布し、自由意思により回答を得た。

(2) 調査内容

① 対象者の属性

看護師経験年数、所属病院と部署、実習指導経験の有無と担当科目

② 当該授業での学びと活用可能性

- a. 当該授業内容に関する既習状況
- b. 当該授業内容の理解状況とその理由
- c. 当該授業内容の実習指導への活用可能性とその理由
- d. 当該授業内容の看護実践への活用可能性とその理由

それぞれ4段階のリッカート尺度により既習・理解状況および活用可能性の程度について回答を得た。また、b～dのうち、理由については自由記載としてそう回答した理由を得た。

(3) 分析方法

- ① 対象の属性は単純集計を行った。
- ② 選択肢による回答については単純集計を行った。
- ③ 学びの実習指導内外における活用については、自由記載への記述を設問意図の視点から類似性に注目してグループ化し、その類似している内容を示すような表現で示した。

4) 倫理的配慮

対象者に研究の目的と方法、倫理的配慮等を記載した文書を配布し、口頭で説明を行った。調査票の回収は、回答の有無にかかわらず調査票を個別封筒に封入し建物玄関に設置した回収箱に投入する方法で行い、回答が記載されていた場合に、調査への協力の同意が得られたものとした。本研究は東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 授業の概要

1) 授業内容

授業は実習指導者講習会の一環として研究者が担当・企画したものである。授業目的は「地域包括ケアシステムに関する知識を実習に活かす方法を考える」とし、行政の立場にある招聘講師による90分の講義と、研究者による事前課題およびグループワークから構成した。講義の内容は招聘講師に一任し、「(講師の所属する) A自治体の地域包括ケアシステム推進に関する取り組みについて」として、地域包括ケアシステムの概念と、全国のデータと比較したA自治体の概要、A自治体における地域包括ケアシステムの具体的な内容で構成された。

講義終了後、主として研究者からなる担当者が講義内容を活用した実習環境整備の具体策の提案を求める3時間のグループワークを実施した。

2) 事前課題

研修生に対しては、当該授業の事前準備として課題を提示した。その内容は、学生が実習において地域包括ケアを含めた患者への継続的ケアを学べるよう、自部署で準備しておくことや準備にあたっての課題について具体的に考えてくることとした。

5. 結果

1) 回収率

実習指導者講習会を受講している研修生49名のうち、44名から回答があり(回収率89.8%)、そのすべてが有効回答であった。

2) 対象者の属性(表1)

対象者の所属病院は、最も多いのが私立病院29名(65.9%)、次いで国公立・準公立病院7名(15.9%)であった。所属病院の病床規模は最も多いのが200-399床で28名(63.6%)、次いで10-199床と400床以上がそれぞれ8名(18.2%)であった。

表1 対象の特性と実習指導経験の概要

(n=44)		
所属病院の種類		
私立病院	29	65.9%
国公立・準公立病院	7	15.9%
大学病院・特定機能病院	5	11.4%
その他	2	4.5%
無回答	1	2.3%
所属病院の規模		
10床未満	0	0.0%
10~199床	8	18.2%
200~399床	28	63.6%
400床以上	8	18.2%
所属部署		
外科系病棟	11	25.0%
混合病棟	9	20.5%
精神科病棟	8	18.2%
地域連携・リハビリテーション病棟	7	15.9%
内科系病棟	4	9.1%
母性・小児病棟	3	6.8%
その他	2	4.5%
看護職経験年数		
0~9年	19	43.2%
10~19年	22	50.0%
20年以上	3	6.8%
実習指導の有無と経験時の担当科目(複数回答)		
実習指導の経験はない	19	43.2%
基礎看護学実習	15	34.1%
統合実習	14	31.8%
成人急性期看護学実習	10	22.7%
成人慢性期看護学実習	7	15.9%
老年看護学実習	7	15.9%
母性看護学実習	5	11.4%
精神看護学実習	2	4.5%
小児看護学実習	1	2.3%
看護管理実習	1	2.3%
在宅看護学実習	0	0.0%
その他	1	2.3%

所属部署は外科系病棟が最も多く11名(25.0%)、次いで混合病棟9名(20.5%)、精神科病棟8名(18.2%)、地域連携・リハビリテーション病棟7名(15.9%)であった。

看護職経験年数は10-19年が最も多く22名(50.0%)、0-9年が19名(43.2%)、20年以上が3名(6.8%)であった。

実習指導担当科目(複数回答可)は、基礎看護学実習が15名(34.1%)と最も多く、次いで統合実習14名(31.8%)、成人急性期看護実習10名(22.7%)であった。実習指導の経験がないのは19名(43.2%)であった。

3) 授業内容に関する既習状況(表2)

研修生が実習指導者講習会参加前に地域包括ケアを学んだ経験(複数回答可)は、「学習会等で学んだ」が20名(45.5%)で最も多く、次いで「簡単な

表2 実習指導者講習会参加前の地域包括ケアを学んだ経験(複数回答)

	(n=44)	
	人	%
学習会等で学んだ	20	45.5%
簡単な説明を受けた	18	40.9%
自分なりに調べた	8	18.2%
ニュース等で耳にした	5	11.4%
ほとんど聞いたことがなかった	2	4.5%

説明を受けた」が18名(40.9%)であった。「ほとんど聞いたことがなかった」は2名(4.5%)であった。

4) 授業内容の理解の程度(表3-1)と回答の理由(表3-2)

表3-1 授業内容の理解の程度

	(n=44)	
	人	%
とてもよく理解できた	13	29.6%
どちらかという理解できた	29	65.9%
どちらかという理解できなかった	2	4.5%
理解できなかった	0	0.0%

授業内容の理解の程度は「とてもよく理解できた」13名(29.6%)、「どちらかという理解できた」29名(65.9%)であり、両者を合わせると42名(95.5%)が理解できたと回答していた。

上記のように回答した理由についての自由記載は27名から得られた。その記述を内容別にグループ化し内容を示すよう表現したところ、【新たな知識の獲得だった】【具体的な地域の取り組みが例示されていた】【例示が特定の地域で理解に至らなかった】

【地域包括ケアにおいて看護が機能する場についての知識が広がった】【制度の背景に関する理解が深まった】【看護に引き付けて考える機会が得られた】【看護師の役割理解に到達しなかった】【授業運営が適切だった】【授業運営が不適切だった】の9つが抽出された。

5) 授業内容の実習指導への活用可能性(表4-1)と回答の理由(表4-2)

表4-1 授業内容の実習指導への活用の可能性

	(n=44)	
	人	%
大いに活用できると思う	13	29.6%
どちらかという活用できると思う	28	63.6%
どちらかという活用できないと思う	3	6.8%
活用できないと思う	0	0.0%

また、授業内容の実習指導への活用については、「大いに活用できると思う」が13名(29.5%)、「どちらかという活用できると思う」が28名(63.6%)で、合わせて41名(93.2%)が活用できると回答した。

上記のように回答した理由についての自由記載は29名から得られた。その記述を内容別にグループ化し内容を示すよう表現したところ、【治療や療養方針の根拠として説明できる】【治療や療養方針を見通す必要性を説明できる】【部署の特性として必要な知識である】【看護の役割を地域包括ケアと関連して説明できる】【他の実習とつなげて考えるための支援

表3-2 授業内容の理解の程度理由

記述内容(記述数)	自由記載への記述(一部抜粋)
新たな知識の獲得だった(10)	復習も含む学習になり良かった。 以前看護必要度の研修で習ったことがイメージされやすくなった。 自分なりに調べ、なんとなく分かった気になっていたが、説明をうけることで深まった。
具体的な地域の取り組みが例示されていた(3)	最近参加した認知症の研修でもB自治体の例にふれていたの A自治体の取り組みについて講義していただきわかりやすかった。
例示が特定の地域で理解に至らなかった(3)	A自治体の話が中心であり、地域が違うことにより、理解しがたい部分もあったから。 今回はA自治体についての内容だったので全てが完全に理解できたわけではない。
地域包括ケアにおいて看護が機能する場についての知識が広がった(2)	活動できる場は院内だけでなく地域を含めて全体で行うものだと分かったから。 病院完結型から地域完結型への医療をめざす中で、看護は色々な形で連携・介入ができるという事が理解できた。
制度の背景に関する理解が深まった(2)	高齢者はどんどん増えるが、ベッドには限りがあり、病院や施設のみならず、在宅の役割がとても重要になるということが理解できた。 これからの少子高齢化になる時代において機能分化し連携していくことは大切だと思った。
看護に引き付けて考える機会が得られた(5)	選択の幅を増やし、意思決定支援を行っていくことも大切であると感じた。 患者が適切なサービスを受けるために看護情報(サマリー)も重要であると思った。 患者や家族の意思の尊重、多職種との連携の重要性というところで1番大事・重要な働きかけであるのが看護の役割の一つであると感じた。 医療という目線に目がいきがちであるが患者背景をどれだけ捉えることができるかによって対応が変わってくると感じた。 その人らしさ、自分らしく生活できることを考えケアに当たりたいとあらためて思いました。
看護師の役割理解に到達しなかった(2)	看護師の役割で病院、訪問等で患者や家族と関わっていく以外にもあるのか？ 看護師の具体的な役割はまだわからない。
授業運営が適切だった(2)	講師の先生、パンフレットなどわかりやすかった。 図式されて良かった。
授業運営が不適切だった(2)	主語が明確でなく、事前課題とのつながりが十分に理解できなかった。 授業時間が短い。

表4-2 授業内容の実習指導への活用の可能性の理由

記述内容(記述数)	自由記載への記述(一部抜粋)
治療や療養方針の根拠として説明できる(5)	在宅などへの退院、連携について伝えていこうと思った。 入院期間の短縮・在宅療養が増えることに伴い、その理由づけとなる。活用できると思う。
治療や療養方針を見通す必要性を説明できる(6)	患者の入院前後の生活背景を学生が捉えることが大切だと思った。 看護はつながっているという事を考え看護を提供する事が大切であると指導するのに活用できると思う。 患者の強みを考えケアしていくことなど指導の道しるべでもあると感じ活用できると思った。
部署の特性として必要な知識である(2)	対象患者が多いため 回復期病院なので必要知識であるため。
看護の役割を地域包括ケアと関連して説明できる(4)	地域包括ケアシステムと看護の役割は切り離せない問題であるため。 今までは看護師側が求めていたものを押しつけがちだったが、今回の講義で地域のいろいろな人たちが関わってケアマネさんも看護師に要望している内容がわかり参考になった。
他の実習とつなげて考えるための支援ができる(1)	実習で全てを理解することは難しいと思うが、実習一つひとつを単体でみるのではなく、繋げて考えてほしいと思った。それを伝えていきたい。
活用が必要な学習条件ではない(3)	急性期実習だと目の前のことに精一杯な学生ばかりなので、地域包括、退院後について考えるのは難しいと思う。 現在勤務している病棟は急性期で、入退院支援看護師が入院時から関わっていますが、それを学生に・・・というのはハードルが高い。 学生の受け持ち患者に退院が視野に入った患者が少ない。
指導者自身の理解とマンパワーの不足により十分には活用できない(4)	システムを知ることでスタッフも理解を深められれば学生へもお伝えできると思う。 活用するためには自身の理解をより深めなければならないと思った。 活用するには制度・法律・ワーカーや行政の役割が理解できていない。不十分。

ができる】【活用が必要な学習条件ではない】【指導者自身の理解とマンパワー不足により十分には活用できない】の7つが抽出された。

6) 授業内容の実習指導以外への活用可能性(表5-1)と回答の理由(表5-2)

表5-1 授業内容の実習指導以外への活用の可能性

	(n=44)	
	人	%
とても役立つと思う	20	45.5%
どちらかというと役立つと思う	23	52.3%
どちらかというと役立つたないと思う	1	2.2%
役立つたないと思う	0	0.0%

授業内容の実習指導以外への活用に関しては、「とても役立つと思う」20名(45.5%)、「どちらかというと役立つと思う」23名(52.3%)で、合わせて43名(97.8%)が活用できると回答した。

上記のように回答した理由についての自由記載は30名から得られた。その記述を内容別にグループ化し内容を示すよう表現したところ、【より有効な退院支援に活用できる】【より積極的に多職種と連携することに活用できる】【所属する組織にとって必要である】【地域包括ケアシステムにおける行政の役割を知った】【一住民として役立つ知識だった】の5つが抽出された。

表5-2 授業内容の実習指導以外への活用の可能性の理由

記述内容(記述数)	自由記載への記述(一部抜粋)
より有効な退院支援に活用できる(15)	行政の役割や行っていることを知れたので、患者の退院支援に役立てられると思う。 受け持ち患者が転院・退院などで対象となる場合に活用できると思う。 普段の退院支援や若手の指導の上で役立つと思います。
より積極的に多職種と連携することに活用できる(9)	実習指導以外でも、どのように現場で活かして地域とつなげるように働きかけていくのか考えていかなければならないと感じる。 患者の意思決定を大切に患者に合ったサービスを検討したりなど、今まではMSWに頼っている部分がほとんどだったが情報共有していきたい。 情報収集、コミュニケーションを広げる際にも役立つ
所属する組織にとって必要な知識である(3)	今後の病院の在り方として、地域包括システムと看護の役割は切り離せない問題であるため。 回復期病院なので使う知識だったから。
地域包括ケアシステムにおける行政の役割を知った(2)	役所の方から話を聞くことはなかなか出来ないもので、授業の1コマに入れてもらえる地域とのつながりがより具体的にわかる 行政が病院の大変さや地域の大切さ、それぞれの視点で考えていることがわかり、具体的な事業についても初めて知ったので活用できると思ったから。
一住民として役立つ知識だった(3)	身内の場合も対応できると思う。 国民の権利・義務として活用するべきと思うため。 講義をきき、在宅で過ごすためにあらゆる職種や市の職員が協力している事を改めて知り、自分の家族や周りに介護で困っている人がいればアドバイスしてあげられるなと思った。

6. 考察

1) 授業内容の理解の程度とその理由

ほとんどの対象が授業内容を理解できたと回答した。その理由として【新たな知識の獲得だった】【地域包括ケアにおいて看護が機能する場についての知識が広がった】【制度の背景に関する理解が深まった】という回答理由が示されたこと、およびやはりほとんどの対象が研修受講以前に何らかの方法で地域包括ケアの知識をある程度獲得していたことから、本授業において事前に獲得していた基礎的知識の上に新たな知識を獲得できたと考えられる。

また別に、【看護に引き付けて考える機会が得られた】という理由が示された。今回の講義では、独居高齢者の住宅賃貸契約のサポートや、救急隊へ正確な情報を提供するための高齢者の個人情報連絡票の保管場所の取り決めおよび周知など、地域包括ケアシステムにおける幅広い知識が体系的に提供されたが、看護の役割について直接的には教授されなかった。にもかかわらずこのような回答が得られたのは、事前に課された、働く部署で学生が実習する状況について考えておくことという事前課題、および講義後のグループワークにおける実習環境整備への活用に関する検討によって理解程度が高まったことを示すと考える。

これらはいずれも、既存の知識を発展させた学びであると考えられ、事前課題とグループワークはある程度の知識を得ている者に対し、有効な方法および内容であったと考える。

一方、今回の講義では地域包括ケアシステムを具体的に理解できるようA自治体を例にとった解説がなされたが、これに対しては【具体的な地域の取り組みが例示されていた】と、【例示が特定の地域で理解に至らなかった】の両者が示されており、具体例によってよく理解できた場合と、理解が十分にはできなかったという場合があることがわかった。同様に、前述の看護に引き付けて考えられたかどうかについても、【看護の役割理解に到達しなかった】という理由を示した者もあった。これらは、講義内容を自組織の所在地域や自身の役割に照らし合わせて考えることが効果的に行われたかどうかによる受け止めの相違と推察される。講義内容の理解を促すためには、各研修生が講義内容を自身の状況に結び付けるためのサポートがあると良いと考える。

その際、【授業運営が適切だった】または【授業運営が不適切だった】で示されたように、さらに工夫できる点も多いと考える。今後は、この研修生のレ

ディネスが効果的に活かされるよう、事前課題やグループワーク、教材開発を含めた授業デザインを検討していく必要があると考える。

2) 授業内容の実習指導への活用の可能性とその理由

授業内容が実習指導に活用できるかどうかについては95.5%の対象が、できると思うと回答した。

そう回答した理由をみると、【治療や療養方針の根拠として説明できる】【治療や療養方針を見通す必要性を説明できる】【部署の特性として必要な知識である】【看護の役割を地域包括ケアと関連して説明できる】のように、実習指導において、学生が担当患者を理解し、ケアを計画・実践しようとするときの知識提供や考え方の指導に直接活かしていけるという評価に基づく回答と考える。

また、【他の実習とつなげて考えるための支援ができる】という回答理由は、自身が指導している実習科目で学生が担当する患者の状況においては、地域包括ケアの知識はあまり活用を要しないが、別の実習科目へ進んで患者が異なる療養段階にあるときに、その患者のケアを考えるには地域包括ケアの知識が必要になるという説明ができるというものと考えられる。これはたとえば、自身は周手術期看護実習を担当しているので主として侵襲を受ける直前・直後のケアを指導するが、老年看護学や在宅看護学の実習では同じ患者であっても地域でなじみの暮らしに戻っていけるよう多職種による連携の発想が大切であり、実習はつながっているという説明ができるというようなことであろう。これは、対象が所属する機関が医療を単体で完結させるのではなく、地域包括ケアシステムにおいて他機関と連携すべき一要素であるという理解に基づく活用方法であるとともに、地域包括ケアの本質的な概念を自らの指導状況に引き付けて具体的に理解したことを示したものと考える。

しかし、一方で、自部署の患者の状態から見て【活用が必要な学習条件ではない】ため活用の可能性は低いという理由も示されていた。学生の学習目標に地域連携の視点が含まれていなかったり、所属部署が看護の継続性を優先できないような場合には、地域包括ケアの知識を実習指導に活かすという発想は促進されにくい可能性がある。この場合、グループワークにおいて一見地域包括ケアの知識が必要ないと思われる部署の状況を事例とした検討を行うことも有効かもしれない。

また、この【活用が必要な学習条件ではない】に加えて、【指導者自身の理解とマンパワーの不足により十分には活用できない】も活用の可能性の低さを

示す理由であった。これについては、本研究で学習内容を活用するという意味を明確に定義しておらず、どういう場合に活用したといえるのかについての基準が曖昧であったことが回答の背景にあると考える。地域包括ケアが推進されるなか、学生が患者のニーズに確かに応える看護を学ぶためには、学修条件に寄らず学生への患者理解やケア計画の指導において、患者の来し方行く末を想像する考え方や方法を示すことは不可欠である。しかし、提供される知識の多さがすなわち活用の十分さを表すわけではない。情報量は少なくとも、基盤となる考え方が伝わるのが重要であると考えれば、様々なレディネスにある学生に対し、何をどう伝えることが必須であるのかを検討する機会が必要であったと考える。

上記のことから、本授業は、実習における学生への指導において、地域包括ケアの知識や考え方を活かす方法の学びをもたらししたが、具体的な活用方法については部署等の状況に照らして検討する機会が必要であることが示唆された。他方、どうしたら学びを指導に活用したことになるか、すなわち指導内容と方法を分析・評価する基準については、曖昧な状況のまま進められていたことが示唆され、今後、当該科目のグループワークの進め方を検討する際の課題と考える。

3) 授業内容の実習指導以外の場での活用の可能性とその理由

授業内容の実習指導以外での活用については97.8%と、大多数が役立つと回答した。その理由として挙げられたのが【より有効な退院支援に活用できる】【より積極的に多職種と連携することに活用できる】といった、いままでも地域包括ケア推進のために実施してきた場面において、当該授業での学びを活用することによってより良いものにできるという意見であった。また、【所属する組織にとって必要な知識である】【より有効な退院支援に活用できる】【より積極的に多職種と連携することに活用できる】という回答もあり、これらは【より有効な退院支援に活用できる】【より積極的に多職種と連携することに

活用できる】理由であると解釈できる。所属部署の特徴に基づいて、本授業内容が看護実践に必須の知識であり、これを活用することによってより良い実践が可能になると受け止められていることが示された。

また、別の理由として、【地域包括ケアシステムにおける行政の役割を知った】【一住民として役立つ知識だった】という意見もあったが、これは、講義を行った講師が行政に携わる立場であり、内容も医療に特化しない地域包括ケアの全体像を示したものであったためと考える。看護職を対象とした地域包括ケアシステムに関する研修の内容は医療保健系²⁾であることが多いが、本研修ではより多角的な理解につながったと思われ、これは地域を全体としてとらえた看護の考え方に立って看護を実践していくときの基盤を深化させるものと考えている。

このように、本授業は、実習指導に直結する効果に加えて、その前提となる看護実践そのものの質向上に貢献するものであったと考える。このことは、学生の実習環境整備を超えた本講習会の成果であると考えている。

7. 結論

本研究により、今回の授業は既存の知識を発展させた学びをする上で、事前課題、講義、講義後グループワークはある程度の知識を得ている者に対し、有効な方法および内容であったと考える。他方、具体的な実習指導への活用方法については、部署等の状況に照らして検討する機会が必要であることが示唆された。

8. 引用文献

- 1) 厚生労働省医政局.「保健師助産師看護師実習指導者講習会の実施要綱について」の一部改訂について. 医政発0414第3号 2016.
- 2) 井倉一政、多次淳一郎、前山和子. 保健所管内で取り組んだ看護職間連携のための研修会の事業評価. 東海公衆衛生雑誌 2018; 6: 45-50.